

《第14回までのあらすじ》

主人公の小宝は、南京の大きな商家に生まれ、1937年の日中戦争開始時は小学4年生。疎開先でも日本軍の攻撃で街は焼かれた。その間の12月、日本軍は南京を占領し、街は焼かれ、老人、婦女子も含む中国人の遺体が各所にほうられ、凍り付いていた。長江を流れる夥しい遺体の数からも、この南京大虐殺のすさまじさを物語る。

その後、小宝一家は日本軍支配下の南京に戻った。姉の秀華は、抗日地下組織「救国社」で新聞発行などに活躍していたが、友人の兄の裏切りにより、国民党の地下組織「青團員」でつち上げられ、汪精衛の特務に逮捕、投獄された。

父は必死に探してお金を使って姉を取り戻したが、『おめでなし！』と外出禁止を言い渡す父の姿に、小宝は失望した。

日本軍支配下の南京でも、いくつかの闘いが起こった。まず、生活を守るため、2週間のストを決行して勝利した人力車夫の闘い、中央大学の学生たちによる、校長の食費横領、校長退陣を要求する闘い、日本人のアヘン専売権に反対する汪精衛政権も巻き込んだの、学生たちのアヘン撲滅運動の成功など。

しかし、日本とその傀儡政府は、それらを黙って見過ごすわけにはいかず、小宝が兄さんと親しんできた任建や姉の秀華の恋人、袁倫らは、弾圧を避け、新四軍へと参加していた。

*この連載は、ホームページ「時事評論士 ンヤ」欄でもご覧いただけます。

小宝は1940年夏に南京秣陵中学校に入学以後、仲良しの7人で放課後のサッカーに興じていたが、他方、その7人と「友社」を作り、出版物も発行していた。

袁倫と任建が去ってから、彼らは年上の殷成の援助を望んでいたが、殷成は政治への興味を失いつつあった。一つにはある女性との交際にお金を使っていた。もう一つは、小宝の姉、秀華の事件以来、自分も捕えられ、牢に入れられたら、きっと頑張り切れない。また袁倫や任建のように新四軍に参加し、厳しい規律になど耐えられないと思っていた。小宝たちにも『君たちは若い。もっと本をたくさん読んで、政治のこと

にはあまり関わるな。関わっても何の役にも立たない』と言った。

小宝たちは、殷成は変わった、アテにならないと思った。

秣寧中学の数学教師、于再深は重慶の国民党本部から派遣された地下の南京国民党員で、抗日活動をしていた殷成に目をつけ、『君は恐らく愛情の海に落ちたのだろう。恋愛もしつつ、片方ではやはり国を救わなくては！』と言葉巧みに国民党に参加させた。

殷成は、『毎月かなりの手当てがもらえるし、黨員を一人拡大すれば、ご褒美が出る』と聞いて、心が動いた。だが、何もせずただ手当てだけをもらっていると于再深に叱られ、数人の名簿を出したが、実は、名前を騙っていた。

秣寧中学は私学で、南京では質が

高く、学費も高かったので、裕福な家庭やインテリの出身も多かった。

一人、南京一の茶商人の息子、穆愛国という学生がいた。二人は成績もよく、国民党を信頼し、蔣委員長(蔣介石のこと)を崇拜していた。共産党が蘇北の農村で地主を肅清したという噂を聞いて、反感を持ち、人間性に反すると思っていた。彼らは、地主・資本家と農民・労働者に分かれるのは天地の大義で、変えられない。ある者は管理するのにふさわしく、ある者は一般大衆がふさわしいと思っていた。

中学一、二年の頃は、考え方も小宝たちとそう変わらなかったが、学生運動の高揚と第二次大戦の進展につれ、政治的見解には分岐が生まれてきた。彼らはお金を自由に使い、

毎日茶館に集い、一晚中賭けマージャンをやり、マッサージに通ったりしていた。

于再深は張子広と穆愛国の二人を重視し、機が熟した頃を見計らって、彼らを地下の国民党に参加させた。

この中学では、二つの対立する政治勢力が形成され、多くの学生は、この中間で政治とは無関係な状態にあった。

16 希鷹の歩む道

1943年9月、一人の青年が上海から南京へ派遣された。彼の名は馬知仁。叔父の援助で、南京市銀行の出納の仕事を得た彼は、ある女子行員の親戚の希鷹（小宝の従兄）と知り合った。小宝ら「学文社」の仲

間も加わり、「学文劇団」を作り、馬知仁の演出で演劇に取り組んだりした。ゴーリキーやロシア文学、ロシア革命なども紹介した。

馬知仁には希鷹はとても素直で賢い青年に思えた。祖母との質素な暮らしで、よく勉強し、文系科目だけでなく、数学、物理、化学の全てができた。音楽の才にも恵まれ、先生につきピアノを習ったが、先生は彼に天賦の才を見出し、無料で教えた。馬知仁が希鷹との話で知ったこと。

父の王奇森は河南の戦闘で日本軍の捕虜となり、投降し、汪政府の南京感化院院長となった。幼くして母を亡くした希鷹は、温かい家庭、自分を深く愛してくれる父親を望んでいたが、南京に戻ってから官界でぶらぶらと飲み食いし、女性や賭

け事などの道楽をやる父がイヤで、

ろう。

自分は生まれ損なっただと思っ
た。

また父は、自分が革命の道に進む

国民党については、南京に生まれ

つて多くの共産党員を殺している。

た希鷹は、孫中山先生を国父として
崇拜し、北伐を指導し中国を統一し

今なら自分の肉親ではなく、敵だと
思えると答えた。馬知仁は、希鷹の

た蒋介石も、自分の中では偉大な国
のリーダーだった。「三民主義」の

決心は並大抵のことではない、決し
て一時の衝動ではなく、これまで

考えにも賛成。だが抗日戦争は彼の
考えを変えた。南京陥落と日本軍に

党の薫陶と影響を受けてきたのだ
とわかった。その考えと理想は春雨

よる南京大虐殺は、蒋介石への幻想
を壊した。彼は内戦では英雄かもし

のように、彼の心の中に一滴一滴浸
透したのだと感じた。

れないが、日本鬼子の侵略に抵抗す
る「救いの星」ではなかった。

こうして、希鷹は共産党に参加す
る決心をし、承認された。玄武湖は

「三青团」にも愛国的青年はいる
が、蒋介石を盲目的に崇拜している

2000年以上前、呉の周瑜が水軍
を訓練した素晴らしい景色の公園

だけだ。特に小宝の姉さんが三青团
に騙されてからは、腐敗した組織だ

である。そのほとろで、馬知仁が組
織を代表し希鷹に教育をおこない、

と認識した。彼らについて行けば、

宣誓の儀式とした。希鷹はこの日、

中国の明るい未来はあり得ないだ

1冊のノートに『自分の真の誕生の

日、1945年8月10日』と記した。

『夜が明けた!』

『8年もの月日が、苦しみの連続

17 「夜明け」

だった』

『小日本鬼子が失敗した! 本当

まだ十代の若者たちは、日本軍と

に晴れ晴れした!』

その傀儡の汪精衛政府のもつて、

街じゅうどこでも爆竹を鳴らし、

「抗日」のために、ある者は中国国

街全体が機関銃になったようで、南

民党の地下組織「三青团」へ、また

京人全部が心中の怒りを発散させ

ある者は中国共産党の地下組織へ

るかのようだった。青年たちが大通

と参加したが、両者の間で議論しつ

りで『義勇軍行進曲』を歌い始めた。

つ、悩むものも多かった。そして彼

『起て! 奴隷となるな人民!』隊列

らはついにその日を迎えた。

をなして行進し、市民たちはその騒

1945年8月15日、天皇による

ぎを見て、みな大笑いし、諭えよう

日本の無条件降伏の宣言は、全ての

もない自由と嬉しさを感じた。30万

中国人に「夜明け」をもたらした。

の犠牲者の霊がこの喜びの海を空

16日の未明、南京の街全体が目を

から眺めているだろう。

覚ました頃、何千何万の南京人が街

希鷹と小宝もその人波に入り、歌

頭に出てきた。顔見知りであろうと

った。通りのどこにも日本人は見当

なかつた、互いに手を取り合い、

たらず、急にどこへ行ってしまった

祝いの言葉を述べ合った。

かわからない。日本憲兵隊司令部の

前では、見張りの憲兵は正門の後ろに下がり、手にはまだしっかりと銃が握られ、どうしようもないという表情で、この狂気に近い人の群れを見ていた。朝早く、この正門で二人の武官が跪き、東に頭を下げ、彼らの天皇に謝罪し、割腹自殺したという。

その夜、希鷹、小宝ら《学文劇団》の友人たちは一堂に会し、一晚中議論した。小宝は『百年来、中国が侵略を受け抑圧されてきた歴史がこ

こで終わる。これから平和な状況で国を建設し、貧しく遅れた国を変え

ていける。』と言いつつ、希鷹は、『誰でもそう願っているが、でも僕は落ち着かない。老蔣（蒋介石）が中国

人に平和な生活を楽しむように望むかどうか・・・』と言った。別の一人は『日本帝国主義を打倒しさえす

れば、中国人の間には解決できない矛盾はないと思うよ。老蔣も全国民の意志に反するようなことはやらないだろう。』と言い、多くの者も彼の見方に賛成した。みんなの心は、勝利後の中国に対する大きな希望に満ち溢れていた。

一方、「三青团」の若者たちも、蔣委員長についてきたのは正しかったと、夫子廟の料亭で祝杯を挙げた。

18 日本降伏後の南京

日本の降伏後まもなく、蒋介石は日本人に対し、秩序の維持と国軍（国民党軍）による接收を待つよう

命令した。一団を引き連れ飛行機で南京にやってきた中將は、市民の熱烈な歓迎を受けた。全身アメリカン

スタイルの軍服と、アメリカのジープで得意げに南京の大通りを疾駆する姿は、人々には勝利者として誇らしく、祖国が世界の五大強国の一つになったと感じた。

接收の将軍や役人たちは飛行機を降りるとすぐ、新街口のデパートと洋服屋に向かい、スーツ、革靴、ネクタイなどのおしゃれをした。そして汪傀儡政府機関と日本資本の企業に封鎖の張り紙をした。表に封鎖の印を貼ったら、すぐ裏から荷物を運び出し、空っぽにした。これらの企業は一律に生産を停止したので、多くの労働者が一気に失業した。商人や赦しを求める大小の漢奸は、あらゆる手立てを尽くして、重慶から来た役人たちに賄賂を贈り、家や車、中には妾まで提供したりした。

希鷹の父、王奇森も《中統》(中

国国民党の調査統計局、スパイ組織と言われる)が派遣した隊長を探し出し、とりあえず彼の手に金の延べ棒2本を押し込んだ。その人物は素早くそれを受け取った。

南京の人々は勝利の喜びから、一気に失望の深淵に突き落とされた。長い夢からようやく目が覚めたようだった。接收は、《略奪》とも思われた。中国人民の勝利ではなく、このちっぽけな代理人の《勝利》に思えた。彼らは抗戦の8年間、被占領区の人々を放り出して四川に逃げ、抗戦が終わったらやって来て、被占領区の民衆の血と肉を食べた。彼らはどこでも金品や、民衆の言う、《五子》を奪った。《五子》とは、お金、車、家、女子、証券である。人々が委ねた勝利と国民党への期待は、すぐに泡と消えた。

第二段目の《略奪》は、国民党のいわゆる法定の通貨と、汪偽僞政府の通貨との交換比率を1対200としたため、被占領区の人々の財産は一時に半分に減らされ、商人たちの売り惜しみなどで、物価はその後何倍、何十倍となり、やって来た役人たちは、急に富裕層となった。南京の人々は、『何が国民党か！国民から搾り取る党だ！』と陰で言い合った。

当時、新四軍は8年間の抗戦中ずっと、江蘇地域でゲリラ戦をやって来た。南京に入城し、日本軍の投降を受け入れようとしたが、まだ大都市を管理した経験のない中共（中国共産党）中央は、その条件は熟していないと考え、実行しなかった。

南京の国民政府は、1945年9月2日、正式に日本降伏の儀式を行った。平和を願う国内世論や米ソの動きもあり、国民党と共産党は話し合いを始め、10月10日の「双十協定」が公表され、政治協商会議の開催が約束された。

しかし、実際にはその後も対立、事件は続いていた。蒋介石は、協定調印後も「匪賊消滅」の密命を各地に発した。その結果、解放区への進撃や、昆明の大学での虐殺事件、更には、重慶で政治協商会議が開かれていたその時に、成功を願う講演会や大会が、国民党の特務やその手先により、暴力的に襲撃されたりした。一方、小宝や希鷹らの中学では、

19 「双十協定」と内戦への不安

国民党は学校内に正式に党支部の看板を掲げ、于再深校長も三青团の

ために事務所を都合した。また校長の提案で行われた学生自治会の選挙では、三青团の代表は支持されず、多くの進歩的學生が選ばれた。

學生たちの壁新聞はこれらの事件や内戦のニュースを伝え、高三のクラスの毎週一回の演説会でも、ある學生が涙を流して内戦反対を訴えた。しかし、三青团の學生は、それは共産党の論調であると反論した。

国民党宣伝部は校長を訪ね、『一部の人たちは民主的雰囲気を利用して、人心を惑わす出版物を刊行しているが、君たちの任務は、学校内で共産党と左派勢力の動向に注意し、學生が三民主義と蔣委員長の絶对的な指導を信じるよう教育することである。』『我が国がアメリカ式の民主を実行するのは、正直に言う

と、幻想である。蔣委員長は、戦後の有利な条件を利用して、徹底的に共産党を消滅させると決心した。他のことはその後のことだ。』と言った。

校長はぺこぺこ頭を下げ、その後、《中統》の中心の教師の会議を開いた。彼らは次々に、『學生の間の風向きは悪く、共産党の活動が激しい』『高三の《友社》組織とそのボスの林家宝が問題である』『言うことを聞く良い學生もいるので、我が組織に入れて、あの組織の内部に派遣しよう』などと話した。

宋玉美という女學生は、壁新聞を読むのが好きで、特に小宝らのへ好朋友ぐに興味をもっていた。説得力があり、文芸面も優れていると感じ、自分も投稿し、注目をひいていた。ある日彼女は、校長の指示を受け

た教務主任から、秘密組織への参加と、学生たちの動向を報告するようにと誘われた。『よく考えます』と答えた彼女は、小宝に報告し、自分がおとなしすぎたこと、勇気を出して闘い、そうゆう人物とみなされてはならないと思った。

(へじ)